The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	存在と時間の言語範疇化 ： 日本語文法論への存在論的・認知論的アプローチ
Author(s)	岡, 智之
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58773
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	岡　智之
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　４３　号
学位授与年月日	平成１６年３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	存在と時間の言語範疇化―日本語文法論への存在論的・認知論的アプローチ
論文審査委員	主査　教授　杉本孝司
	副査　教授　三原健一
	副査　教授　小林　恭
	副査　助教授　岸田文隆
	副査　助教授　田野村忠温

論文の内容要旨

本研究の目的は、存在論を基盤とし、認知言語学の理論的枠組みと道具立てを使い、伝統的な日本語文法論の成果も生かしつつ、日本語文法論への存在論的・認知論的アプローチを提示することにある。具体的には、存在概念が文法論の根本にあり、それがいかに言語範疇化されているかを明らかにしていくことにある。そして、もう一方の課題としては、時間概念の言語範疇化を存在概念の観点から明らかにしていくことである。

第1部「序論」では、本研究の理論的な枠組みを提示する。

第1章「本研究の目的と構成」では、本研究の目的と、存在論と認知言語学という大きな枠組みを紹介し、具体的な言語現象として、スル型とナル型の言語類型が、「被制作性としての存在」と「生成としての存在」という存在了解の差異から存在論的にとらえかえされる。

第2章「日本語文法と存在論」では、山田文法の統覚作用の言語的発表である陳述が存在詞にあるということを出発点に、文成立の根底に存在概念があることを指摘する。ここで山田への和辻哲郎の批判をとりあげ、繋辞としての「である」の用法も「あり」の限定であり、事物が存在するということは人間存在を顕示することであるということから、山田の陳述を存在論的観点からより根底的に位置づけた。さらに山田文法の継承者である川端善明の文法論によって、より具体的に日本語文法が存在論的に位置づけられる。川端は、文が「知られること」と「知る働き」の結合としての判断に対応するということを出発点に、判断に対応する文の原初的な形式を形容詞文とし、その形容詞文述語を様相的に分析したものとして、動詞文が成立するとした。

動詞文における様相的意味であるヴォイス、テンス、アスペクト、動作態、ムードなどの助動詞はすべて存在様相として位置づけられる。より存在論的に言うならば、形容詞文に含まれる存在詞文こそが、文の一切の原点だといえるであろう。このようにして、日本語の文の総体が存在概念を基盤に成立することが基礎付けられる。

第2部「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク」では、存在構文を中心に、名詞、形容詞、動詞述語文などの日本語の諸構文がネットワークとして記述される。

第3章では、「存在構文から名詞、形容詞述語文へ」と題して、中心的存在構文（Ｙニ Ｘガアル）から、二つの主題化構文—所在構文（ＸハＹニアル）、場所主題化構文（ＹニハＸガアル）—の拡張を基礎にして、名詞述語文、形容詞述語文が範疇化される。典型的な名詞述語文（XハYデアル）は、所在構文の認知過程を継承しており、また倒置指定文（YハXデアル）は場所主題化構文の認知過程を継承している。形容詞述語文においては、情態（属性）形容詞文（XハA）は所在構文の認知過程を継承しており、情意・感覚形容詞文（（Yハ）XガA）は場所主題化構文の認知過程を継承して、二重主語構文に連続することが、その認知図式を通して明らかにされる。

第4章では、「動詞述語文の複合的ネットワーク」と題して、動詞述語文のベースに「生成＝存在」のスキーマを据え、日本語動詞述語文全体のネットワーク化がおこなわれる。この放射状カテゴリーの中心になるのは、中心的存在構文である。まず広義存在構文として、関係・相当・存在動詞、知覚文、能力文などが位置づけられる。動詞述語文には大きく<生成><移動><行為>の基本スキーマがあるが、<生成>のうち、ナル文は状態変化動詞に拡張し、デキル文は実現、可能文へ拡張する。これらは、さらにラレル文へ拡張される。<移動>は<生成>の具体化として位置づけられ、そのうち、移動様態型は動作動詞へ拡張される。<行為>の典型として、制作的行為のスキーマがあげられ、その中間に、所有権の移動、使役移動、状態変化他動詞、働きかけなどがある。行為のスキーマはさらに使役のスキーマへと拡張する。

第5章は、「存在構文に基づくテイル（テアル）構文」と題して、すべての動詞類型を包み込んで事態を存在化する構文であるテイル（テアル）の位置を鮮明にさせる。テイル（テアル）構文は、存在様態型（YニXガVテイル（テアル）を通して、中心的存在構文（YニXガアル（イル））に連続し、さらに過程存在型、結果存在型へ拡張し、主体化を通して、出来事存在型（パーフェクト）へ拡張する。単純状態のテイルといわれるものも、存在構文のさまざまな特性を継承し、痕跡的認知や心的移動といった認知過程によって拡張されたものである。このテイル/テアル構文を重要な環として、時間の言語範疇化（テンス、アスペクト）を存在概念から位置づける試みに連続

していく。

第３部「時間の言語範疇化」では、テンス・アスペクト、パーフェクトなどの時間の言語範疇を存在論的に位置づけ、身体的基盤に基づいたアスペクトモデルを提案する。

第6章は「テンス･アスペクト論の存在論的基礎付け」と題して、第２節では、ハイデッガーの時間論を背景に、言語学における時間把握は、日常的な配慮された時間から基礎付けられることを提起した。第３節では、テンス・アスペクトという文法範疇の分化以前の原型的な時称形態として「完了」（いわゆるperfect）を考え、ヨーロッパ諸語における時制組織のなかで、「完了」という文法範疇が、現在の状態の変容した在り方である（「現存性」）ということを先行研究から明らかにした。第４節では、山田・川端文法におけるテンス・アスペクト論を検討した。川端は、テンスとアスペクトの関係について、過去、現在といったテンスの対象的意味は、アスペクトの対象的意味である完了・未完了（「広義完了」（或る過去に起源をもつものの持続））によって与えられるとする。テンス・アスペクトを位置づけるとき、まず原点となるのは、「今、ここ」における発話者の存在である。そして発話者の事態の捉え方―「確認」「直認」「回想」「予期」など―がアスペクト、テンスを規定していくのである。第５節では、事態を現実領域にあるか非現実領域にあるかという基本的認識モデルを基礎に、テンスを考えるラネカーの知見を応用して、時間把握の基本的認知モデルを提示した。これらのテンス・アスペクト論を基礎に、第６節では、現代日本語のテンス・アスペクトについて具体的に言及した。人間が把握する事態はまず現実事態と非現実事態に分けられる。現実事態は既に在る事態（既在）であり、非現実事態はまだない事態（未在）である。存在文との関わりから具体的な言語形式に即して言うならば、ル形は存在文と時相的様相的意味が等価であり、テイル形は存在文の直接的に文法化したものであり、事態の現実存在を表す。タ形は歴史的経緯から考えても存在の意味が残っており、事態の既存在を表す。具体的用法として、結果存在、出来事存在、出現＝存在などの用法とその認知過程を記述した。第7節では、日本語と関連の深い琉球語、アイヌ語、朝鮮語、中国語などの東アジア諸言語で存在と時間がいかに密接に結びついて言語範疇化されているかを明らかにした。

第7章は「プロセス展開スキーマによるアスペクトモデル」と題して、第２節ではまず、アスペクトという文法範疇とは何かを考える上で基本問題とも言うべき、Perfective vs. Imperfectiveの意味論について再検討する。第３節では、日本語アスペクト論として、工藤（1995）のアスペクト論を批判的に検討し、また、従来の動詞分類によ

るアスペクト的意味の記述という方法論の問題点を指摘する。第４節では、アスペクトの文法形式と動詞の相関をモデル化することを目指し、事態の開始、過程、終結などをスキーマ化した「プロセス展開スキーマ」（ Narayanan1997）を日本語に適用した身体性に動機付けられたアスペクトモデルを提案し、さまざまな動詞類型のアスペクト的意味を記述する。テオク構文、テシマウ構文についても本動詞からの拡張の観点から記述した。

第４部「朝鮮語における存在と時間の言語範疇化」は、存在論的、認知論的アプローチを他の言語にも適用したものとしての事例研究である。

第8章は、「存在型アスペクトとしての朝鮮語ko/eo issta構文」と題して、朝鮮語の存在構文（issta構文）からko/eo issta構文へのネットワークの記述をおこない、第９章は、「現代朝鮮語のeo nohta/tudaの意味論」と題して、本動詞から補助動詞への文法化の観点から、日本語のテオクにあたるeo nohta, eo tudaの記述・分析をおこなう。

第5部「結論と展望」では、これまで述べてきた存在論的、認知的アプローチの哲学的含意を含め、その一般的展望と課題を述べる。第10章は「認知科学と現象学のあいだ」と題して、認知科学と現象学の接点についての研究を概観し、第11章は、「言語研究への存在論的アプローチの展望」と題して、存在論的アプローチが具体的に言語研究にどのように生かされるのかに関してその大きな展望を明らかにしていく。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は認知言語学に依拠しながら、日本語文法論への新たなアプローチを提示しようとする意欲的な取り組みである。岡智之氏（以下著者）が本論文で目指した内容は、全体としては次のような試みとして理解できる。

（1）日本語諸構文の構文論的ネットワークを提示し、同時に、その拡張の核に存在構文をプロトタイプとして位置付ける。

（2）認知的基本レベルとしての「存在」概念とその哲学的基盤を明らかにする。

（3）テンス、アスペクトなどを存在様相として位置付ける。

（4）身体性に動機付けられた日本語アスペクトモデルを提案する。

（5）事例研究として(1)~(4)で示された枠組みを朝鮮語に適用する。

以下、これらの試みに関して審査要旨を述べる。

（1）

日本語諸構文の構文論的ネットワークとそのプロトタイプは、当然のことながら、論文審査において質疑応答がもっとも集中した部分である。特に

(a) 構文の拡張の動機付け

(b) 場所表現と同一性を表す構文(AハBデアル(A = B))の関係

(c) 「存在」から「行為」への概念的拡張

(d) 「移動のスキーマ」を介在させることによる「行為のスキーマへの拡張」

に関しては種々の意見陳述や質疑応答があった。著者はある程度これらの意見や疑問に応えたが、(a)構文の拡張に関しては、確かに取り上げた構文が多いため、ということもあるが、細かな所まで配慮した上での動機付けとはなっていない場合も多く、今後の課題として残ることが確認された。(b)は、基本的には場所と固体の問題がどのように位置付けられるのか、ということと深く関わっており、単に「場所」から「固体」へのメタファー的拡張としては片付けられない問題があるのではないかという指摘があった。同様の問題が(c),(d)にもあるが、著者は「する」言語と「なる」言語の類型に構文拡張の拠り所を求めていることもあり（但し著者は「する」言語というよりも作製動詞「つくる」を基本とする）、その言語観を具現化しようとする試みとしては、問題の多い拡張ではあるが全体的な位置付けが十分理解できる拡張でもあるとされた。

（2）

認知的基本レベルとしての「存在」概念とその哲学的基盤に関しては、なぜ「存在」が中心となるのか、ということに関して、国語学の先達や認知言語学が意識的に取り上げるまで言語学ではあまり顧みられることのなかったハイデッガーの存在論にその基盤を求めている。これらの考えを消化吸収して著者の言語観の基盤とすることにある程度成功していると判断できたが、哲学における「クリティーク」の考え方が不十分であること、「歴史的身体性」の議論が欠如していること、「存在論的」という概念には日常言語との関わりでは二つの観点があるがそのような観点に触れていない、など今後の検討課題として確認できた。

（3）

存在様相としてのテンス、アスペクトなどに関する言語学的な問題として、動詞形式（「ル」形、「テイル」形）の平行性が場所と時間で必ずしも一致しないことや、先行研究のモダリティー論に安易に同調する論の展開などが問題とされた。しかし、全体の議論としては、国語学、哲学、認知言語学の関連性が明示的に取り上げられ、存在概念による時間概念の言語範疇化の図式を説得力あるものにしていると言える。

（4）

身体性に動機付けられた日本語アスペクトモデルにおいては、人間の神経回路の計算機モデルが言語範疇としてのアスペクトといかに関わるかということに関して、プロセス展開スキーマに基づ

くモデルを提案しているが、審査においては、その大筋において著者のモデルは妥当なモデルであることが確認できた。但し、日本語動詞分類がプロトタイプ理論に依拠していることもあり、論を展開する当初から厳密な意味でのアスペクト的動詞分類は不可能である、という態度をとっていることに関しては、統語構造（特に目的語（あるいは着点）が現れた場合の意味解釈）を大幅に考慮すべきであるといった指摘がなされ、著者の今後の課題とされた。

（5）

事例研究としての朝鮮語の存在と時間の言語範疇化に関しては、取り扱った資料範囲の恣意性や、共起関係の捉え方に不十分な点が見られることなどが指摘されたが、全体的には(1)~(4)で示された枠組みを朝鮮語に適用した事例研究として満足できる内容であることが確認された。

以上、存在概念を中心に、存在と時間の言語範疇化の図式を提供する認知言語学的試みに、その大筋において成功していると判断できた。個々の分析の細かな点や論考には不満が残る部分がないとは言えないが、本論文の主旨からして、それらは今後の課題として位置付けることができる。国語学、日本語学、言語学、哲学、脳研究、心理学、など幅広く研究しながら、一つの体系的な言語観とそれに基づく言語分析のアプローチを提供する本論文は、その質・量ともに審査委員を圧倒させるに十分のものであり、すでに言語学関係の学会で数多くの口頭発表もし学会誌にも数多くの掲載論文がある著者の今後の発展が大いに期待されると同時に、本論文が博士号に十分値する労作であるという審査委員全員の一致した結論を得た。